

「妖怪アパート萃夢荘」

風・花・妖・緋の世界を後にしたレイム達の目の前に新たな世界が広がった。

初めに視界に入ってきたのは古ぼけたアパートだった。

「ねっ、ここではどんな異変が起こってるのかしらっ？」と気だるげに言うレイム。

「どのあえず中に入ってみましょっ」とサナエ。

アパートに入ると今にも死にそうで倒れている鬼を発見。

その光景に異変の匂いを感じるレイム達。

鬼の元かけより、かすかにもれる息の音から言葉を拾い事情を聞く。

「何、それ・・・禁酒っ」

「何々言うていることの意味がわからなかったが、平たく言えばこうだよだ。

酒は鬼にとっては人間が生きるので不可欠な水と同様の価値があるという。

つまり、鬼が水のように飲んでる酒がどんなに飲んでも尽きないのは酒を生み出す泉（湖・滝）があるのだがそこが枯渇してしまっているらしい。

人間にとっては問題ないが、鬼にとっては死活問題だ。

まあ、本当に死ぬわけでもないだろうし、酒をやめるのに良い機会ではあると思うが仮にもこの鬼はアパートの管理人。

管理人がこれでは住人も困ることです、レイム達はその泉が枯渇した原因を探りに向かう。

泉の枯渇した理由は「単純なものでその主で話を聞いて、異変をサクッと解決。」

「今回の異変はかなりの楽勝だったわね」「ニヤリと笑う。

「本当にこれで異変は解決したのでしょうか？」横で疑問符を浮かべるサナエ。

「どのあえずレイム達は泉の主からもらった幻の酒を手に入れたと帰還するよ。」

そしてレイム達の上空を一筋の影が過ぎ去っていった。

【怪知識】

「異変はサクッとこの解決屋レイムが解決してきたわよ」

「今回の異変のお説ひとして泉の主様から幻の酒『砕月』をちびってきました」酒瓶を大事にかかえるアキユウ。

レイム達は鬼の前に大量の酒と幻酒を差し出す。

「まあ、一応はほやほやにこなわらぬ」

乾ききった鬼はレイムの言葉も聴かず、酒に食らいついた。すると、幻の酒『砕月』を口に含んだとたんに鬼が光を放ちはじめた。

「とにかく逃げるわよー!」慌てて逃げるレイム達。

外に出て見上げるとそこには月を砕きかねない勢いで巨大化した鬼の姿があった。

「なんてことなのー?」

他にもアパートの住人が崩壊するアパートの巻き添えを食わないようにと次々と這い出てきた。

呆然としているレイム達。

「好都合だぜー!」

「てか、異変を解決するって言うのは世界にいつもと変わらない日常を戻すことなんだぜ?こんなだと解決屋失格だな」

満面の笑みを浮かべた魔里沙が空からレイム達を見下ろしていた。

「へっ!そんなことわれなくてもわかっているわよ!」口元をゆがめるレイム。

酒のアルコール度数が強かったのかすっかり酔ってしまった鬼は暴れはじめた。

「なんとかして、止めないと!このままでは!」

レイム達は久しぶりの酒に酔いしれている巨大化した鬼をどうにかしようと戦闘態勢に入った。

鬼を鎮めようと戦闘態勢にはいったがただ鬼は暴れているだけでレイム達に敵意はないと考えていた。

しかし、それは魔里沙の挑発によって一変した。

「○△#※☆!」

さらに鬼の怒りや混乱を誘おうとする。

案の定、鬼の怒りは頂点に達し、もう取り返しのつかないことになってしまった。

レイム達全員で総攻撃をかけるも歯がたななかった。

「どのあえず、マリサとレイムは一時的に手を結び鬼退治をすることになった。」

（戦闘シーンはディクエイトをよく知らないのとどのあえず割愛させていただきます。）

再び鬼が光を放つと鬼は元の大きさに戻り、崩壊しかけたアパートの天井で眠っていた。

酒を抱いて眠るその姿はとても幸せそうだった。

このことが鬼によって全て夢であってほしい。

核を手に入れたレイム達は光琳堂に戻った。

鬼を怒らせた魔里沙の姿はいつの間にか消えていた。

後日、聞いた話によるとあの幻の酒には魔里沙が何かを仕込んでらしい。

レイムは新たな世界の出現に目を向けた。

「一体、何が異変だったのかしら。マリサもいつの間にかいなくなってるし。。。。」

「鬼の日常が壊れていたことでは？」
ため息をつくレイム。

「次はお礼に宴会にでも招きなさいよ。全へ。」

次の世界を背につぶやいたレイム。

そして、新しい世界へと吸い込まれていった。

「次は、紅魔郷の世界ね…。」

次回、紅魔郷の世界↓